第 4章　中学校の研究

第 1節　研究の構想

1　研究主題

『自他の存在を大切にした自己表現力の育成」

2　主題設定の理由

高度に発達した科学や物質文明が生み出す複雑な社会状況は、子どもたちの心身の成長にも大きな影響を与えています。思いやりの心や耐性の欠如、利己的行動や人間関係の希薄化等の否定的側面は、現代人の特徴として大人にも子どもにも共通して指摘されています。また、中学生は思春期という自我の発達の著しい中にあり、自己についての認識を深める過程で自己承認を強く求める一方、自尊心や羞恥心を肥大化させ、自己不全感や自己存在感の不安に駆られる時期でもあります。先に述べた現代人が共通に抱える問題は、思春期に特有のこのような心の在り方と相まって、豊かな自己の確立や社会性の育成を著しく困難なものとしています。

子どもたちに「生きる力」をはぐくむことが、21 世紀を見通したこれからの学校教育の最大の課題として提起されています。このことは、中学生という困難な時期にあって、自己確立につながる「豊かな人間性」をいかにして育成するかが問われているものと考えます。

わたしたちは、豊かな人間性は豊かな人間関係の中ではぐくまれると考えます。そして豊かな人間関係をはぐくむためには、互いの人権を尊重し、一人一人の子どもたちが自分の個性を発揮し、自己を見つめ成長していくための自己表現力を形成すること、同時に他の存在を認めあえる土壌をつくりあげ、他者との相互理解や相互交流を図る中で自己理解と他者理解を深めあうことが不可欠であると考えます。

以上のことから、わたしたちは、自己の思いや考えを適切に表現することを通して他者の存在を共感的に理解する力の育成こそが、豊かな自己形成に必須の条件であると考え、上記の研究主題を設定しました。

3　研究の仮説

自他の存在を大切にした自己表現をはぐくむためには」

(1) 自他の存在を大切にした自己表現の基盤（場）づくり

豊かな自己表現力をはぐくむためには、生徒一人一人が心を開き、のびのびと自己表現できる場の設定が必要です。学校の教育活動の基本に、生命の尊重や自尊感情の育成を置き、あらゆる教育活動の場において自己存在感や成就感を実感することのできる表現活動を意識的に行うことで、自他を大切にする豊かな感性を育てると考えます。

(2) 豊かな自己表現を育てる実践活動

一人一人の生徒が自己の思いや考えを表現する方法を学ぶとともに、実際の表現の場で他者と交流し、相互理解を図ることを学びあうことが必要です。このような表現活動を意識的に繰り返すことをとおして、自己理解や他者理解が深まり、自他の存在を大切にした豊かな人間関係を構築することができると考えます。

第２節　思春期の特性と生きる力

１　思春期の発達特性

12歳から15歳という中学生の学齢は青年期の入り口である「思春期」の前半に当たり、生物学的に見れば第二次性徴の発現によって特徴付けられる、心身の変化の著しい時期とされています。青年期は子どもたちが親からの精神的自立を企図し、新しい価値を模索しながら自分なりの生き方を創り出し、自己を確立していくという課題を遂行せねばならない時期です。しかし、その入り口にあたる「思春期」には自己の確立よりも混乱が、自信よりも不安感が優位となり、不安定な心理状態が目立ちます。特に性的成熟が精神的な成熟に先立つために心身のバランスが失われ、これまでになく心身への大きな負担が強いられることになります。そのため、子どもたちにはこの時期に特有のさまざまな徴候が現れてきます。以下では、主として中学生の時期にあたる「思春期前期」に焦点を当てながら、この時期の発達特性について考えてみることにします。

(1) 思春期の特性

ア 自己意識（自我）の成長

児童期の終わりから思春期にかけて、自分の考え方や行動を決定する基盤となる自我が急激に成長します。子どもたちは自己を客観的にとらえる視点をもち始めるとともに、他人と自己とを比較したり、自分の姿を批判的に見たりしながら自分らしさについて考え始めます。

この時期は自我の確立の途上にあるため､次のような意識上・行動上の特徴が現れてきます。

- 思考力・判断力・推理力や感性の著しい発達（「理屈っぽさ」）
- 「他者の目」に対するする敏感さ
- 自己の弱さを防衛するための他罰的言動（「責任転嫁」など）
- 無口や周囲に対する無視などの自己閉鎖的な態度や強い羞恥心
- 他との不協和から生じる焦燥感や孤独感、自己存在感の欠如（不安感）
- 自己中心的思考がもたらす批判的・反抗的言動

イ 価値観の混乱と再編

自我の成長ともに､児童期までの心の安定を支えてきた価値観や規範意識が揺らいできます。親と同じように考えたり行動したりすることへの疑問や抵抗の意識が生まれ、それまで当然のように思っていた価値や規範への信頼が揺らいできます。その結果、子どもたちは自分なりの経験と思考を頼りに、新たな価値や行動の基準を主体的に見いだそうとしはじめます。「今までこうしてきたから」ではなく、「ぼく（わたし）がこうしたいから」という自己主張が目立つようになり、それは時として親や教師などの大人との極度な緊張関係を招くことにもなります。

このような変化は、自分の中にある他律的な価値意識を一旦解体し、自律的な価値として編成し直す過程としてとらえることができます。しかし、一見強力な自己主張の背後には、自己中心的で未成熟な感情が潜んでいることも多く、特に中学生の段階においては次にあげるようなきわめてアンビバレント（両義的）な心理的・情緒的な特徴を生じさせることになります。

・自分で判断し行動しようとする自立（律）傾向の増大と、行動の結果に対する不安感
・社会の価値観や現実の社会に対する拒否とその反動としての極度の理想主義
・理想と現実のギャップが生み出す葛藤や自己不全感、自尊感情の低さ
・自分の現状に対するいらだちからくる衝動的な言動、あきらめの意識

ウ 社会性の発達

親からの精神的分離が進むにつれ、生活の場面や行動の範囲も拡大し、友人関係を中心とした新たな人格的結合が強まってくるのもこの時期の特徴です。価値意識の変化に伴って、児童期に特徴的な単なる「仲のよい」友達にとどまらず、何らかの精神的な結びつきを中心とした友人関係をもとうとする意識が現れてきます。こうした友人関係の変化は、子どもたちがより広い社会性を獲得していく上での契機となるものであり、青年期全体を貫く最も重要な課題の入り口に当たるものです。新しい友人関係の形成は、一方で自分自身が主体的に選択してより深い人間関係をつくりあげることにつながります。さらに、多様な個性をもつ多くの人と交わる中で、自分とは異なる他の存在を認め、助け合い協調する資質の獲得にもつながっていきます。つまり、それは社会性の基礎を形づくる人間関係における「深さ」と「広さ」をもたらす必須の条件となるものなのです。

しかし、中学生の時期はこの過程の入り口であるということもあって、友人関係・社会性の側面に次のような複雑な特徴が見られるようになります。

・友人との深いかかわりの希求（親との距離の相対的な拡大）
・友人関係を通じての共感的（他を思いやる）態度の獲得
・友人関係がもてない場合の孤立感、自信の喪失、劣等感
・負の価値観を共有する反社会的集団の形成
・仲間意識優位の裏面としてのいじめ、無視、仲間外れ

以上のように、思春期の特性として指摘される様々な傾向には一見両極の間を揺れ動くような特徴が見られ、まさにこのことが、この時期の子どもたちの「扱いにくさ」となっています。しかしここで大切なことは、これは大人の立場から見た「扱いにくさ」であるにとどまらず、実際に子どもたち自身が「自分を扱いかね」、混乱する時期にあることの証しであるということです。最初に述べたように、思春期は子どもたちが一人の人間として自己を確立していくための不可避の過程であり、この時期に自分の中に生じた混乱を自分の力で収拾していくことが求められているのです。

(2) 思春期の発達課題

この混乱の時期を乗り越え、自我の確立へと向かうために、子どもたちがこの時期に遂行しなければならないいくつかの典型的な発達課題があります。

一つ目の課題は、変化する身体を受け入れ、新たな自己像を描き受容することです。性的な変化と自我の成長は、「他者の目」を強く意識させます。さらに、親の庇護の下での安定感を失ったことが、往々にして自分に対する自信のなさ、自尊感情の乏しさ、不安感に対する防衛

機制としての反抗などの傾向を生み出します。そのような混乱の中にあって、自分の姿を否定的側面をも含めてありのままに見、それに気付いている自分をかけがえのないものと実感することから自己確立の一歩が始まります。周囲からの信頼と適切な支援があれば、自分を大切に思う心情は、他を同様にかけがえのない存在としてとらえる態度や他への信頼感を生み出します。また、自分のよさへの気付きは、自分を価値ある存在としてとらえ、さらによりよく生きようとする意欲をもつことへとつながります。

このように、自我の成長の著しい時期に適切な支援を行うことは、子どもたちに「自尊感情」や「自己肯定感」をはぐくみ、自己の確立という青年期全体の大きな課題へと立ち向かうための基盤をつくりだすことになるのです。

二つ目の課題は、親からの精神的離脱の達成です。親の価値規範への信頼からの離脱は精神的な混乱を伴いますが、子どもたちはこの混乱の中で、自己の支えとして同世代の友人との関係の中に新たな価値を見いだそうとします。友人とのこの親密な関係を通じて、他者の中に「共通の人間性」の発見が行われるとともに、自他の違いから生じる友人との関係の葛藤の中から社会性への意識が芽生えてくるのです。

自他の間に豊かな人間関係を結ぶことは、自己の社会化を図るということです。この課題はすでに見たように、青年期全体を貫くより大きな課題でもありますが、中学校段階では、その最も基礎となる他者との交流が何より求められます。他者との間に豊かな人間関係を結び自己の社会化を達成するためには、他者との適切なコミュニケーションを日常的に図ることがなによりも重要です。いじめなどの否定的な人間関係や若者の表層的な人間関係の問題性が指摘されている今日、どのような場を設け、どのような活動を促すことが子どもたちの自己確立を支援することになるのか考える必要があります。

(3) 発達課題の解決を支援するために

上に述べた発達課題は、子どもたちが自ら解決していかねばならない課題です。しかしながら、そのことは「なるに任せる」ということではありません。思春期にさしかかる子どもたちには、すでにそれぞれの個性が備わっており、また、子どもたちを取り巻く環境によっても課題解決の形やその結果が大きく左右されます。

教育が子どもたちの自己実現を扶ける営みであるとすれば、子どもたちがこれらの思春期の発達課題を達成できるように支援することが中学校教育の最大の課題となってきます。発達課題の適切な解決過程を支援する方法については様々なものが考えられますが、本研究においては次のように考えてみました。

豊かな人間性をはぐくむためには、すでに述べたように、他者との関係を通して自己理解、他者理解を深める必要があります。その際、他者とのかかわりは「表現」を媒介として行われることから、子どもたちに適切に自己を表現する力（「自己表現力」）をはぐくむことが重要になると考えます。さらに、そのような力をはぐくむためには、ありのままの自分を肯定的に受けとめることのできる「自尊感情」、そして自分自身を発揮することによって得られる「自己存在感」を感じさせる場を設定することが必要と考えます。そこで、本研究においては、子どもたちの「自尊感情」と「自己存在感」を高めながら、自他を大切にした「自己表現力」をはぐくむことを通して、自他の相互理解と自己認識、他者認識を深め、自己の確立と社会性の基盤づくりをめざすことを主題として設定しました。

このような視点に立って、以下では中学生の時期の発達課題を念頭におきながら、まず「自尊感情」、「自己存在感」、「自己表現力」の意味と相互の関係を考えてみます。そして、その

後に、具体的にどのような方法で支援することが最も適切な課題解決につながるかについて考え、子どもたちの自己実現を支援する学校教育の在り方についての糸口を探ってみたいと思います。

2　自己存在感と自尊感情

(1) 自己存在感

人間は、その人に代わる人が他に存在しないという意味で、かけがえのない存在です。人は、他者とのかかわりの中で生きており、そのかかわりの中で自己の存在感を見い出せるとき、生き生きと活動できると言えます。自己存在感を得ることなしに自分を肯定的に見ることはできず、また、自己実現を図ることはできません。

自己存在感は、自分がかかわっている場や集団の人間関係の中で肯定的に認められることの喜びや充実感を感じ、自分自身に納得ができるような生き方を確立していくという過程の中で得られる感情です。他者とのかかわりの中で自分自身を見つめ、心の居場所を作る中で感じられるものです。

仲間と共に共通の目標に向かって協力し合う活動の中で、相手の立場に気付き、助け合いや思いやりのある態度を育てることができます。そして、自分がその集団の中の価値ある成員であることを実感し、互いに認め合い、協調性しようとする態度をもちはじめます。

(2) 自尊感情

子どもたちが自分自身を見つめる中で、自己の確立に向けて歩もうとするとき、「自分を肯定的に思える感情（自尊感情）」を高めていくことが大切になってきます。自尊感情は、自分を否定的にとらえるのではなく、自分を肯定的に認め、「自分らしさ」に自信をもち、自分を価値あるものと誇れる感情ということができます。自分を価値あるものと思えることは、自己実現への意欲を高めます。

アメリカの心理学者マズローは、人間の欲求を分かりやすい体系に編成した「欲求五段階説」を唱えています。

マズローの「欲求五段階説」

5	**自己実現の欲求**	── 自分の能力、可能性を発揮したり、創造的活動や自己の成長を希求する欲求
	↑	
4	**自我・自尊の欲求**	── 自分が周囲から価値ある存在として認められ、尊敬されることを求める欲求
	↑	
3	社会的欲求	── 集団に帰属し、仲間として受け入れられたい、他人と関係をもちたいという欲求
	↑	
2	安全・安定の欲求	── 自分の存在や生活上の安全や安定を求める欲求
	↑	
1	生理的欲求	── 食欲、休息や睡眠の欲求その他生命維持にかかわる基礎的な欲求

マズローは、「欲求は基底的なものから上位のものへと階層構造を成しており低位の欲求が

充足されることにより、一段上の欲求の重要性が高まってくる」と考えます。さらに、自尊感情については、「自尊感情は人間だれにでもある感情で、自分を成長させたい、自己実現させたいと思う感情と深く結びついている。そして、自己肯定感は、自分が所属しているグループの中で他者から認められ、存在感や有能感を感じることで、もつことができる感情である」と述べています。このことから、自己実現を図るための基盤として、自尊感情を高めることが大切であることが分かります。

自らを肯定的に評価するためには、まず自分のよさを正しく認識する必要があります。それは他の人と比較することによって「優れている」「劣っている」という見方ではなく、一人の人間として、家族や友達、周りの人から認められ、存在感を感じ、「自分はかけがえのない大切な存在なんだ」という自覚をもつことにそのよりどころがあると言えます。

このように、適切な自尊感情は、豊かな人間関係や生活体験の中で育つと言えます。自らを肯定的に見ることができるようになると、他の人を同様に肯定的に見ることができます。さらに、社会性の基礎である、豊かな人間関係を築き、共感的な態度で他の人にも接することができます。また、困難な場面でも他の人と協調しながら、問題解決に向かって前向きに行動できるようになることが期待できます。自分を大切にし、そして自分につながる他者を大切にするような広がりをもち、人間性を豊かにはぐくむために、自尊感情の高まりは欠くことができない要素であると考えます。また、他者の存在を共感的に理解し、自他の人権を尊重する人権意識を高めるためにも、自尊感情の育成が大切になります。

(3) 自己存在感・自尊感情を形成するもの

自己存在感や適切な自尊感情の形成には以下のような要素が関係しており、特に「他者とのかかわり」が重要な役割を果たします。

1　他者からの受容的態度
2　重要な他者からの肯定的な関心・評価
3　共感的な理解
4　自己のふりかえり

他者、とりわけ「重要な他者」からの是認や賞賛などの肯定的な評価が、自己存在感や自尊感情の形成に大きくかかわっています。特に学齢期では「重要な他者」として、教師や友人、親を挙げることができます。また「重要な他者」からどれだけ多くの尊敬、受容、関心のあるかかわりを受けたかが、自己存在感や自尊感情の形成のメカニズムに大きくかかわってきます。

また、自尊感情は自己実現に向けて行動し、「成功」の経験が積み重ねられることによって高くなり、自らの失敗を自ら反省するのではなく、他者から「失敗」を指摘され、注意を受けるといった経験によって低くなる場合が多いと考えられます。自己存在感や自信感情は、他者との人間関係の相互作用の中で高めることができますが、それは「他者の目」を過敏に意識することからはぐくまれるのではなく、他者からのまなざしと自己の内面との葛藤から、自己をより深く見つめる作業や他者との豊かなコミュニケーションを通してはぐくまれるものです。そして、マズローも言うように、自己実現の欲求へと向かうものなのです。

自尊感情 ← 成功＞失敗

このように、他者とのかかわり合いの中で、自己存在感と自尊感情は、互いに関連し合いながら豊かな人間性の育成につながっていきます。

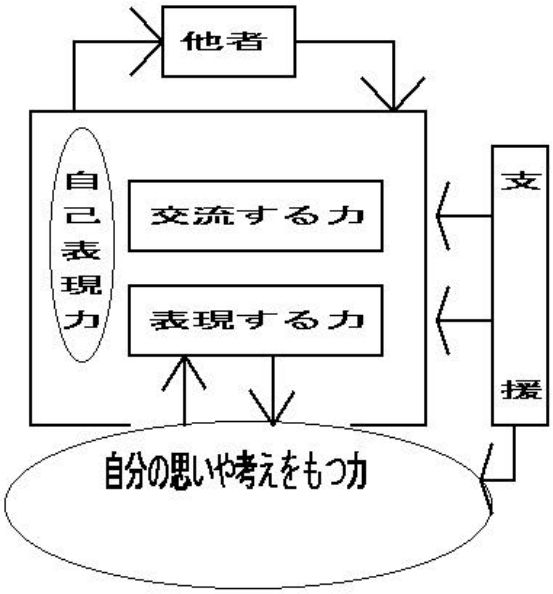
３　自己表現力

(1) 自己表現力とは

これからの社会を生きるためには、自分と考え方や習慣などが違う他者への理解を深め、問題を共有しながら解決していくことが求められています。そのためにも自己を豊かに表現し、他者との相互理解を深めるための自己表現力が必要だと考えます。

自己表現とは、自らの内面に迫り、それを表現することを通して自己を向上させることであり、他者との人間関係を築き、自己実現を図るために必要とされるものです。

自己表現力には、人間が生きるための基盤としてある「自分の思いや考えをもつ力」、それを表現し、交流するための「表現する力」や「交流する力」が含まれます。



自分の思いや考えを持つ力 」は、人間が生きているあらゆる場面で発揮される力、主体的で豊かに生きるために必要な力です。それは、表現を生み出す基盤となる力です。

表現する力」は、自分の思いや考えを的確に表現するための言語運用能力や創造的な表現技能です。相手にわかるように筋道を立てて論理的に表現する力であり、創造力を生かしながら、形あるものに置き換える力です。

表現したものを基にコミュニケーションを図る場合、相手にわかりやすく表現する力と相手のことを理解しようとする力が重要です。これらの力を活用して自分の内面にあるものを表し、それを他者と交流することで、互いが理解し合い、よりよい関係を生み出すことが可能となります。まさに、この行為を支えている力が **交流する力」**であると考えます。

豊かな自己表現を生み出すためには、これらの力が相互に関連し合いながら適切に働くことが必要です。

(2) 表現する力

自分の思いや考えを表現するとき、言語を通して行われる場合もあり、音や絵画・造形や身体表現などを通して行われる場合もあります。

いずれにしても、自分の思いや考えを表現するためには、表現のための技能が必要になってきます。言語で表現する場合は、目的や場面に応じて適切な言葉を選び、適切に使うことができる言語運用能力がそれにあたり、音や絵画や身体表現などで表現する場合は、演奏や造形や体操などの創造的な表現技能がそれにあたります。

これらの力をはぐくむとき時、自分が表現したものをもう一度振り返ることが大切です。自分の思いを的確に表現できているかをどうかを吟味することにより、一層自分の思いを整理したり深めたりすることができ、適切な表現技能をより高めることができるものと考えます。

(3) 交流する力

コミュニケーションとは、自分の思いや考えを言葉やその他の手段によって表現し、それを

他者と交流することです。言語や絵画、体の動きなどの表現を他者と交流することは、主体的な個を確立し、他者との共感を生む、人間が生きていくために重要な活動です。

特に、これからの社会を生きるためには、自他の関わりを円滑にする言語を通したコミュニケーション能力が求められます。つまり、相手にわかりやすく表現すること、目的や場面に応じた表現をすることが重要であり、自分の思いや考えを大切にしながらも相手の立場に立って言葉を発することが不可欠です。

また、もう一つの重要な要素として、「聞くこと」があげられます。この「聞くこと」とは受け身的な行為ではなく、能動的な行為としてとらえる必要があります。「聞くこと」は、他者の表現内容を批判・共感・反発・疑問・納得などをしつつ聞くことであり、そのことは自己を振り返り新たな自分自身の考えや見方を生み出していくことにつながります。

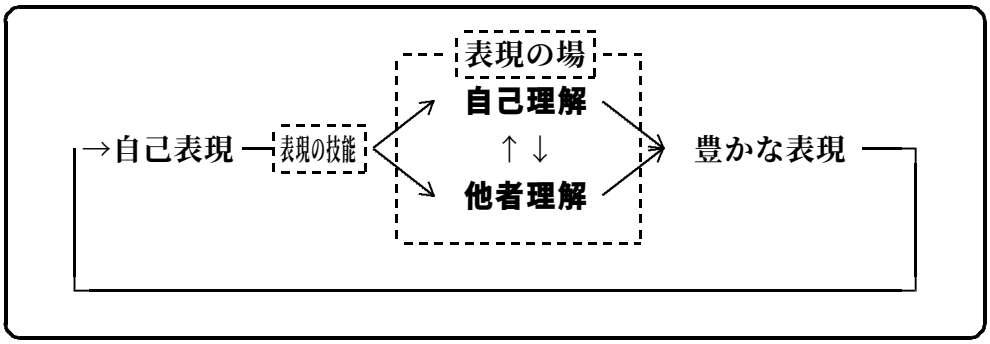
人間は、様々な方法でコミュニケーションを図ることで、他者の表現を理解し、他者理解を行います。自己を大切にしながら他者理解を行うことによって相互理解が生まれ、他者に対する信頼が深まり、望ましい人間関係が構築されていきます。これからの社会を生きるためにも、コミュニケーションを通して、豊かな人間関係を築き、豊かな生活を送ることが重要なのです。

(4) 自己表現を通した自己理解

自己を豊かに表現するためには、自分自身への気づきを契機とする自己理解が必要です。また、豊かな自己表現を通して自分をもう一度振り返り、自己理解を深めることができます。そして、この自己表現を支えているのが、自尊感情や自己存在感です。

一方、他者に自分を表現するためには、他者への基本的な信頼感も重要です。「相手に自分の気持ちなどを伝えたら、相手ももっとわかってくれるかも知れない」といった他者への基本的な信頼感があるからこそ、豊かな自己表現が生まれてくるのです。

この意味でも、前述した自尊感情や自己存在感、そして他者への信頼感と自己表現力は密接に関係していると考えられます。



第３節　アンケート調査から見る生徒の現状

１　アンケート調査の分析について

研究主題「自他の存在を大切にした自己表現力の育成」にかかわり、「自己表現力」「自尊感情」「自己存在感」の項目を中心に、本府の中学生の傾向をアンケート調査を基に、分析し、考察しました。

◎　分析の対象項目

○ 自己表現力」についての分析と考察

・自己表現力の項目　設問［11･28･29］

○ 自己表現力」の育成に深く関連すると思われる 自尊感情」自己存在感」についての分析と考察

・自尊感情の項目　設問［8･26・27］・自己存在感の項目　設問[9・10]

○ 自己表現力」と他の項目との関連についての分析と考察

＊［11］「あなたは自分の気持ちや意見を家族や友人など親しい人に伝えることができますか」

＊［28］「あなたは自分の意見を学級会などで伝えることができますか」

・［８］自尊感情　・［９］自己存在感　・［12］思いやり　・［15］適応力

・［22］攻撃性　・［24］感性　・［30］人権意識

※［　］番号はアンケート番号を示す

２　自己表現力」と自己表現力の育成に深く関連すると思われる 自尊感情」自己存在感」についての分析と考察

＜表＞

・表の数値には、%が省略されています。

・合計が 100%にならないのは、記入の不備及び未記入を含め算出したためです。

(1) 自己表現力についての分析と考察

自己表現力[11]

設問(11)：あなたは自分の気持ちや意見を、家族や友人など親しい人に伝えることができますか。

選 択 肢：ア）しっかりできる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

	ア	イ	ウ	エ
[11]	18.4	51.9	22.6	6.6

自己表現力［28］

設問(28)：あなたは自分の意見を、学級会などで伝えることができますか。 選 択 肢：ア）しっかりできる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

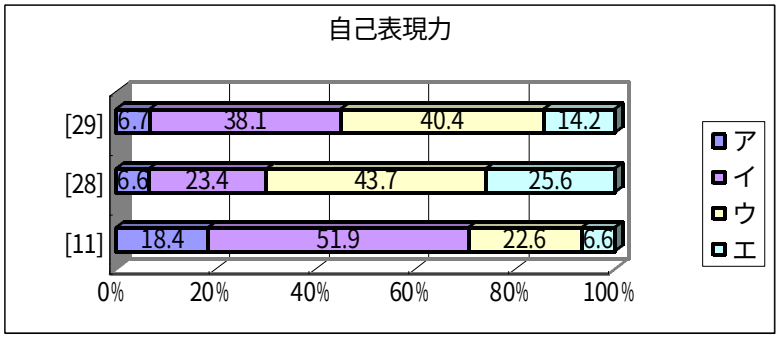
	ア	イ	ウ	エ
[28]	6.6	23.4	43.7	25.6

自己表現力［29］

設問(29)：あなたは他の人の意見を尊重しながら、自分の意見を述べることができますか。 選 択 肢：ア）十分できる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

	ア	イ	ウ	エ
[29]	6.7	38.1	40.4	14.2

【分析と考察】



自己表現力[11]については「しっかりできる」「できる」と回答している割合は70.3%であるが、[28]では「しっかりできる」「できる」と回答している割合は30%と、[11]に比べると低い割合になっています。これは、[11]の自己表現力が、私的な場つまり自己を表現しやすい人間関係や存在感を感じることができる場での質問であるのに対して、[28]は公的な場、つまり「緊張」や「防衛」が作用する場であるためだと考えます。一方[29]の質問においては、「十分できる」「できる」と回答している割合が44.8%であり、他を尊重した自己表現力については半数以上の生徒が課題を示しています。自己表現力を含めてコミュニケーション能力の育成が必要であるとともに、学級など自己開示を十分にできる場を設けていくことも課題であると思います。

(2) 自己表現力の育成に深く関連すると思われる「自尊感情」「自己存在感」についての分析と考察

ア 自尊感情についての分析と考察

自尊感情［8］

設問(8)：あなたは自分のよいところを分かっていますか。 選 択 肢：ア）よく分かっている　イ）分かっている　ウ）分からない

	ア	イ	ウ
[8]	9.8	42.9	46.7

自尊感情［26］

設問(26)：あなたは自分が好きですか。
選 択 肢：ア）とても好き　イ）好き　ウ）あまり好きではない　エ）きらい

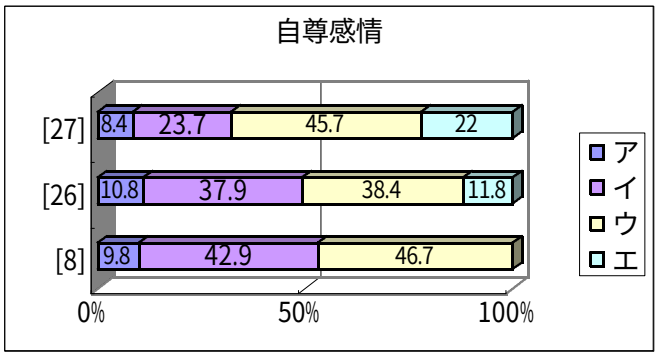
	ア	イ	ウ	エ
[26]	10.8	37.9	38.4	11.8

自尊感情［27］

設問(27)：あなたは自分に自信がありますか。
選 択 肢：ア）大変ある　イ）ある　ウ）あまりない　エ）ない

	ア	イ	ウ	エ
[27]	8.4	23.7	45.7	22.0

【分析と考察】



自分のよさ（自尊感情[8]）については「よく分かっている」「分かっている」と回答している割合は 52.7%であり、46.7%は自分のよさを自覚できていません。

自分を好き（自尊感情[26]）と回答している割合（「とても好き」「好き」）は48.7%であり、よさを分かっている割合とほぼ同じです。しかし、自分に自信がある（自尊感情[27]）割合（「大変ある」「ある」）は 32.1%であり、[8][26]と比較すると低くなっています。自分を肯定的にとらえていても、自信がもてない中学生の姿が見られます。

イ　自己存在感」についての分析と考察

自己存在感[9]

設問(9)：あなたは学校生活の中で自分自身を発揮できていますか。
選 択 肢：ア）できている　　イ）あまりできていない
　　ウ）できていない　　エ）分からない

	ア	イ	ウ	エ
[９]	18.7	36.8	13.0	31.3

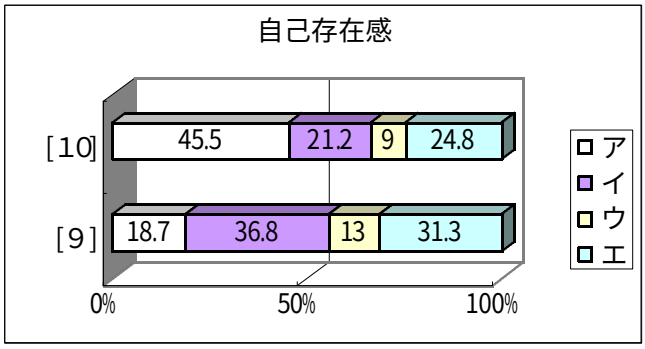
自己存在感[10]

設問(10)：あなたは家族の中で自分自身を発揮できていますか。
選 択 肢：ア）できている　　イ）あまりできていない
　　ウ）できていない　　エ）分からない

	ア	イ	ウ	エ
[10]	45.5	21.2	9.0	24.8

【分析と考察】

学校生活の中で自分自身を発揮することに関して、「あまりできていない」「できていない」と回答している割合は、49.8%であり、発揮「できている」と感じている割合 18.7%を大きく上回っています。家族の中では、発揮できていると感じている割合は、45.5%であり、学校生活に比べれば、高い割合になっていますが、発揮できていないと感じている割合も５割を超えています。学校生活の中で自分を発揮できている割合が２割に達していないことは、見過ごすことのできない大きな課題であると思います。また、半数以上の生徒が家庭の中でも、自分を発揮できていないと回答していることは、家庭生活の場も自己存在感を感じにくい場となっているのではないかと思われます。



3　自己表現力と他の項目との関連についての分析

(1) 分析にあたって

自己表現力と他の項目との関連を分析するにあたって、表とグラフを活用し分析することにしました。

＜表＞

・表については、調査対象全体を 100 として、その割合を表示することにしました。全体でどの程度の生徒が回答しているのか、全体としてどのような相関の関係があるのかを見るためです。

・合計が 100%にならないもの、また設問 11 と設問 28 で数値が異なることがありますが、記入の不備及び未記入を含め算出したためです。

・分析において表の数値を加減して表示する場合、小数点以下は四捨五入しています。

＜グラフ＞

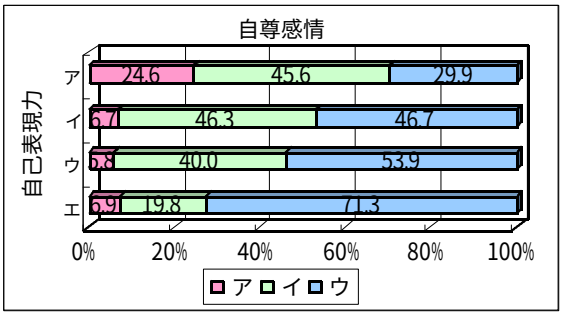
・グラフについては、自己表現力を中心に他の項目の回答の割合を示すことにしました。自己表現力について高いと回答した生徒と低いと回答した生徒の間にはどのような違いがあるのかを比較するためです。

・＜表＞と同様、各項目のパーセンテージの合計が 100%にならないものがありますが、記入の不備及び未記入のものも含め算出したためです。

《例》自己表現力＜ 11 ＞と自尊感情＜ 8 ＞

自尊感情

自己表現力 11		ア	イ	ウ	エ	合計
	ア	4.5	8.4	5.5		18.4
	イ	3.5	24.2	24.4		52.1
	ウ	1.3	9.1	12.2		22.7
	エ	0.5	1.3	4.7		6.6
	合計	9.8	43.0	46.9		99.7



＊「表」の 4.5 は、全生徒のうち、＜設問 11 ＞の自己表現力及び＜設問 8 ＞自尊感情、両方とも「ア」と回答した生徒が 4.5 %であるということです。

＊同様に中抜き数字の 4.7 は、自己表現力＜設問 11 ＞を「エ」と回答し、自尊感情＜設問 8 ＞を「ウ」と回答した生徒が全生徒の 4.7 %であるということです。

＊「グラフ」中の自己表現力「ア」の 24.6 は、自己表現力＜設問 11 ＞で「ア」と回答したうち 24.6 %の生徒が自尊感情＜設問 8 ＞においても「ア」と回答したことを示します。

＊同様に自己表現力「エ」の 71.3 は、自己表現力＜設問 11 ＞で「エ」と回答した生徒のうち 71.3 %の生徒が自尊感情＜設問 8 ＞において「ウ」と回答したことを示します。

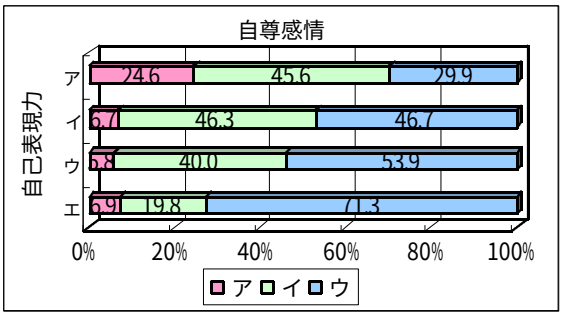
(2) ＜自己表現力＞と＜自尊感情(8)＞の相関の特徴

設問(８)：あなたは自分のよいところを分かっていますか。
選 択 肢：ア）よく分かっている　　イ）分かっている　　ウ）分からない

ア　＜自己表現力(11)（私的な場）＞と＜自尊感情(８)＞

設問(11)：あなたは自分の気持ちや意見を、家族や友人など親しい人に伝えることができますか。
選 択 肢：ア）しっかりできる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

自己表現力11 ＼ 自尊感情	ア	イ	ウ	エ	合計
ア	4.5	8.4	5.5		18.4
イ	3.5	24.2	24.4		52.1
ウ	**1.3**	**9.1**	12.2		22.6
エ	**0.5**	**1.3**	4.7		6.5
合計	9.8	43.0	46.8		99.6



＜表＞

・自己表現力も高く自尊感情も高い生徒（　）は全体で約 41 %、自己表現力は高いが自尊感情の低い生徒（斜体数字）は約 30 %である。
・自己表現力も自尊感情も低い生徒（中抜き数字）は約 17 %である。
・自己表現力が低い生徒は全体では約 29 %（　）であるが、その中で自尊感情が低い生徒は約 59 %（17/29)である。

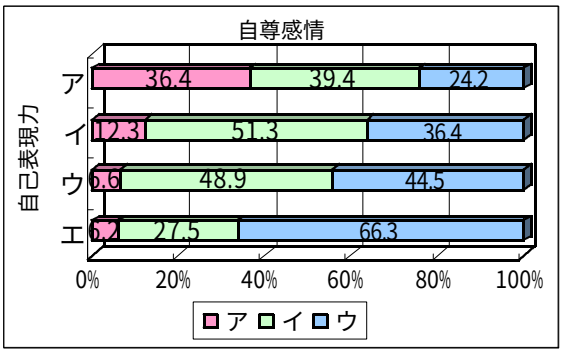
＜グラフ＞

・自尊感情の(ｱ)「よく分かっている」について見てみると、自己表現力の高い(ｱ)では 24.6 %、自己表現力の低い(ｴ)では 6.9 %と 17.7 ポイントの差が見られる。
・自尊感情の(ｳ)「分からない」については、自己表現力の高い(ｱ)では 29.9 %、自己表現力の低い(ｴ)では 71.3 %と 41.4 ポイントの差が見られる。

イ　＜自己表現力(28)（公的な場）＞と＜自尊感情(８)＞

設問(28)：あなたは自分の意見を、学級会などで伝えることができますか。
選 択 肢：ア）しっかりできる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

自己表現力28 ＼ 自尊感情	ア	イ	ウ	エ	合計
ア	2.4	2.6	1.6		6.6
イ	2.9	12.1	8.4		23.4
ウ	**2.9**	**21.5**	19.6		44.0
エ	**1.6**	**7.1**	17.1		25.8
合計	9.8	43.3	46.7		99.8



＜表＞

・自己表現力も高く自尊感情も高い生徒（　）は 20 %、自己表現力は高いが自尊感情の低い生徒（斜体数字）は 10 %である。
・自己表現力も自尊感情も低い生徒（中抜き数字）は約 37 %である。
・自己表現力が低い生徒は全体では約 70 %（　）、その中で自尊感情が低い生徒は約 53 %(37/70)である。また、自尊感情の高い生徒（33 %、太数字）は約 47 %である。

＜グラフ＞

・自尊感情の(ｱ)「よく分かっている」について見てみると、自己表現力の高い(ｱ)では 36.4 %、自己表現力の低い(ｴ)では 6.2 %と 30.2 ポイントの差が見られる。
・また、自尊感情の(ｳ)「できていない」については、自己表現力の高い(ｱ)では 24.2 %、自己表現力の低い(ｴ)では 66.3 %と 42.1 ポイントの差が見られる。

〔相関の特徴〕

＊自尊感情が高い生徒は自己表現力も高い（　）。自尊感情が低い生徒でも、親しい人間関係の中では自己表現ができる傾向にある（　）。
　＊私的な場で自己表現できない生徒は少ない。
＊自己表現力が低い生徒の中では、自尊感情が低い生徒の割合が多い。
＊公的な場では全体として自己表現力は低くなり、自己表現力の高い生徒は全体の 30 %である。しかし、その中の約 66 %(20/30)の生徒は自尊感情も高く、自尊感情の高さが公的な自己表現と強く結びついている。
＊自尊感情の高さと、公的な場での自己表現力との間には、強い結び付きが見られる。

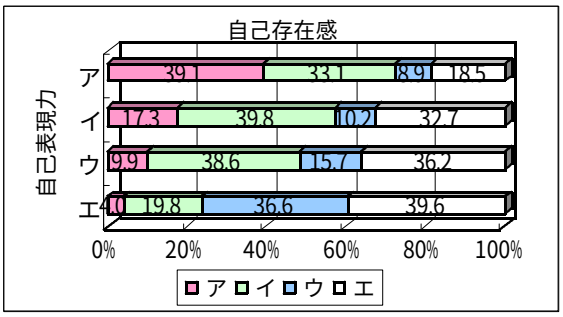
(3) ＜自己表現力＞と＜自己存在感(9)＞の相関の特徴

設問(9)：あなたは学校生活の中で自分自身を発揮できていますか。
選択肢　：ア）できている　イ）あまりできていない　ウ）できていない　エ）分からない

ア　＜自己表現力(11)（私的な場）＞と＜自己存在感＞

設問(11)：あなたは自分の気持ちや意見を、家族や友人など親しい人に伝えることができますか。
選 択 肢：ア）しっかりできる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

自己表現力11 ＼ 自己存在感	ア	イ	ウ	エ	合計
ア	7.2	6.1	1.6	3.4	18.3
イ	9.0	20.7	5.3	17.1	52.1
ウ	**2.2**	8.8	3.6	8.2	22.8
エ	**0.3**	1.3	2.4	2.6	6.6
合計	18.7	36.9	12.9	31.3	99.8



＜表＞

・自己表現力も高く自己存在感も高い生徒（　）は全体で約 16 %、自己表現力は高いが自己存在感　の低い生徒（斜体数字）は約 34 %である。
・自己表現力は低いが自己存在感の高い生徒（太数字）は 2.5 %、自己表現力も低く自己存在感も低い生徒（中抜き数字）は約 16 %である。
・自己表現力が低い生徒は全体では約 29 %（　）であるが、その中で自己存在感が低い生徒は約 55 %(16/29)である。「分からない」も含めると約 93 %の生徒は自己存在感が低い。

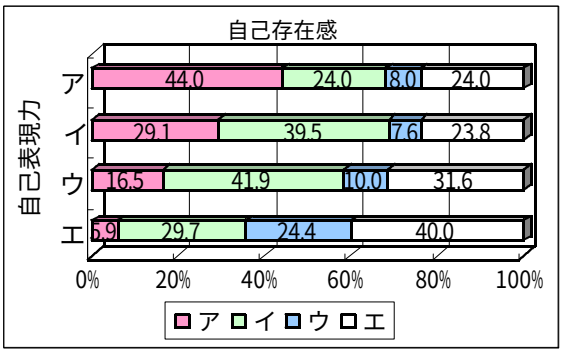
＜グラフ＞

・自己存在感の(ｱ)「できている」について見てみると、自己表現力の高い(ｱ)では 39.1 %、自己表現力の低い(ｴ)では 4.0 %と 35.1 ポイントの差が見られる。
・また、自己存在感の(ｳ)「できていない」については、自己表現力の高い(ｱ)では 8.9 %、低い(ｴ)では 36.6 %と 27.7 ポイントの差が見られる。

イ　＜自己表現力(28)（公的な場）＞と＜自己存在感＞

設問(28)：あなたは自分の意見を、学級会などで伝えることができますか。
選 択 肢：ア）しっかりできる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

自己表現力28 ＼ 自己存在感	ア	イ	ウ	エ	合計
ア	2.9	1.6	0.5	1.6	6.6
イ	6.9	9.3	1.8	5.6	23.6
ウ	**7.3**	18.5	4.4	13.9	44.1
エ	**1.5**	7.7	6.3	10.3	25.8
合計	18.6	37.1	13.0	31.4	100.



＜表＞

・自己表現力も高く自己存在感も高い生徒（　）は約 10 %、自己表現力は高いが自己存在感の低い　生徒（斜体数字）は約 13 %である。
・自己表現力は低いが自己存在感の高い生徒（太数字）は約 9 %である。
・自己表現力も低く自己存在感も低い生徒（中抜き数字）は約 37 %である。
・自己表現力の低い生徒は全体では約 70 %（　）であるが、その中で自己存在感が高い生徒は約 13 %(9/70)、低い生徒は約 53 %(37/70)である。

＜グラフ＞

・自己存在感の(ｱ)「できている」について見てみると、自己表現力の高い(ｱ)では 44.0 %、自己表現力の低い(ｴ)では 5.9 %と 38.1 ポイントの差が見られる。
・また、自己存在感の(ｳ)「できていない」については、自己表現力の高い(ｱ)では 8.0 %、自己表　現力の低い(ｴ)では 24.4 %と 16.4 ポイントの差が見られる。

〔相関の特徴〕

＊自己存在感の有無にかかわらず私的な場での自己表現力は高い。つまり、自己存在感は低くても、親しい人間関係の中では自己表現ができると考えられる。
＊私的な場における自己表現力が低い生徒の中で、自己存在感のある生徒は約 2.5 %と少なく、自己表現できない生徒の中には自己存在感を感じていない生徒が非常に多い。
＊公的な場において自己表現力が高く、自己存在感も高い生徒は非常に少なくなる。しかし、自己表現力が高ければ高いほど、自己存在感を感じている比率も高い。
＊公的な場では、全体として自己表現力も自己存在感も低い生徒の割合が高い。自己表現力の低さは、自己存在感の低さに比例している。

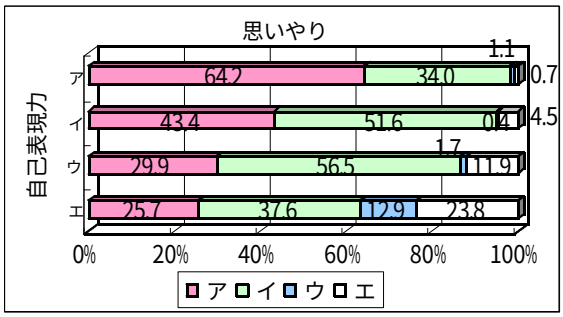
(4) ＜自己表現力＞と＜思いやり(12)＞の相関の特徴

設問(12)：あなたは友人やよく知っている人が困っているのを見ると、どう思いますか。
選択肢：ア）助けようと思う　　イ）場合によって助けようと思う
　　ウ）助けようと思わない　エ）分からない

ア　＜自己表現力(11)（私的な場）＞と＜思いやり（12）＞

設問(11)：あなたは自分の気持ちや意見を、家族や友人など親しい人に伝えることができますか。
選 択 肢：ア）しっかりできる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

自己表現力 11	思いやり ア	イ	ウ	エ	合計
ア	11.9	6.3	*0.2*	0.1	18.5
イ	22.7	26.9	*0.2*	2.3	52.1
ウ	**6.8**	12.8	0.4	2.7	22.7
エ	**1.7**	2.5	0.9	1.6	6.7
	43.1	48.5	1.7	6.7	100

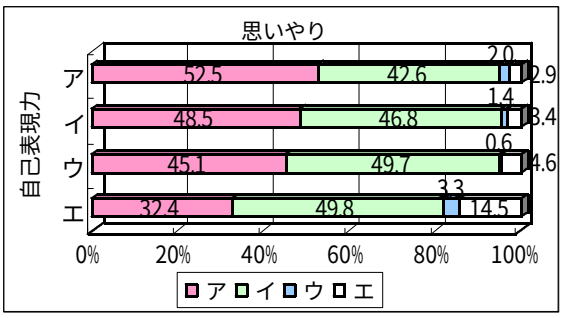


＜表＞
・自己表現力も高く思いやりも高い生徒（　）は全体の約 35 %、自己表現力は低いが思いやりの高い生徒（太数字）は約 9 %である。
・自己表現力が高く「助けようと思わない」と回答した生徒（斜体数字）は 0.4 %、また自己表現力が低く「助けようと思わない」と回答した生徒（中抜き数字）は 1.3 %である。
＜グラフ＞
・思いやりの(ｱ)「助けようと思う」について見てみると、自己表現力の高い(ｱ)では 64.2 %、自己表現力の低い(ｴ)では 25.7 %と 38.5 %の差が見られる。

イ　＜自己表現力(28)（公的な場）＞と＜思いやり(12)＞の（相関）関係

設問(28)：あなたは自分の意見を、学級会などで伝えることができますか。
選 択 肢：ア）しっかりできる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

自己表現力 28	思いやり ア	イ	ウ	エ	合計
ア	3.5	2.8	*0.1*	0.2	6.6
イ	11.4	11.0	*0.3*	0.8	23.5
ウ	**19.9**	21.9	0.3	2.0	44.1
エ	**8.4**	12.8	0.9	3.7	25.8
合計	43.2	48.5	1.6	6.7	100



＜表＞
・自己表現力も高く思いやりも高い生徒（　）は全体の約 15 %、自己表現力は低く思いやりの高い生徒（太数字）は約 28 %である。
・自己表現力が高く「助けようと思わない」と回答した生徒（斜体数字）は 0.4 %、自己表現力が低く「助けようと思わない」と回答した生徒（中抜き数字）は 1.2 %である。
＜グラフ＞
・思いやりの(ｱ)「助けようと思う」について見てみると、自己表現力の高い(ｱ)では 52.5 %、自己表現力の低い(ｴ)では 32.4 %と 20.1 ポイントの差が見られる。

〔相関の特徴〕
＊思いやりのある(ｱ)の生徒でも、私的な場に比べ公的な場においての自己表現力は低くなる。また、「場合によって助けようと思う」(ｲ)及び「分からない」(ｴ)に回答した生徒においても同じ傾向が見られる。
＊しかし、思いやりの(ｳ)「助けようと思わない」の生徒は、自己表現力についての高低は、私的な場、公的な場関係なく割合は同程度である。
＊思いやりと自己表現力との関係はないと考えられる。

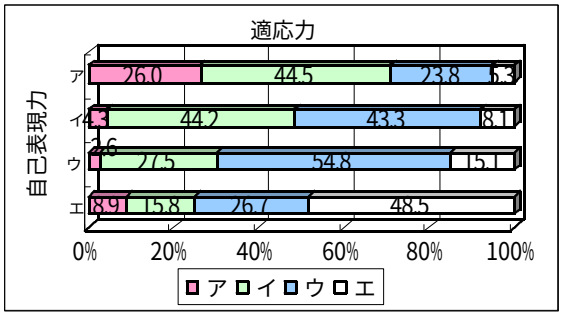
(5) ＜自己表現力＞と＜適応力(15)＞の相関の特徴

設問(15)：あなたはどんな状況や環境の中でも、自分らしくふるまえますか。
選択肢　：ア）しっかりできる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

ア　＜自己表現力(11)（私的な場）＞と＜適応力＞

設問(11)：あなたは自分の気持ちや意見を、家族や友人など親しい人に伝えることができますか。
選 択 肢：ア）しっかりできる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

自己表現力 11 ＼ 適応力	ア	イ	ウ	エ	合計
ア	4.3	8.2	4.4	1.0	18.4
イ	2.2	23.0	22.6	4.2	52.0
ウ	**0.6**	**6.3**	12.4	3.4	22.7
エ	**0.6**	**1.1**	1.8	3.2	6.7
合計	8.2	38.6	41.2	11.8	99.8

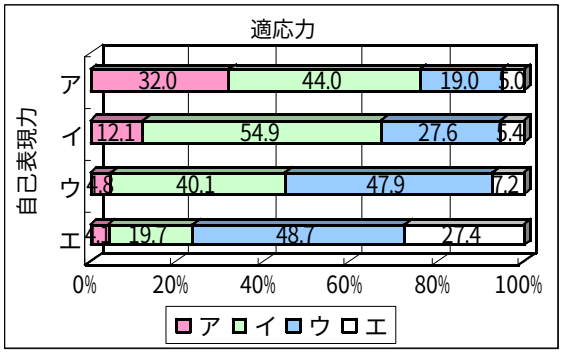


＜表＞
・自己表現力も高く適応力も高い生徒（　　）は全体で約 38 %、自己表現力は高いが適応力の低い生　徒（斜体数字）は約 32 %である。
・自己表現力は低いが適応力の高い生徒（太数字）は約 9 %、自己表現力も低く適応力も低い生徒（中抜き数字）は約 21 %である。
・自己表現力が低い生徒（　　29 %）の中で適応力も低い生徒は約 72 %（21/29)である。
＜グラフ＞
・適応力の(ｱ)「できる」について見てみると、自己表現力の高い(ｱ)では 26.0 %、自己表現力の低い(ｴ)では 8.9 %と 17.1 ポイントの差が見られる。
・適応力の(ｴ)「できない」については、自己表現力の高い(ｱ)では 5.3 %、自己表現力の低い(ｴ)では 48.5 %と 43.2 ポイントの差が見られる。

イ　＜自己表現力(28)（公的な場）＞と＜適応力＞

設問(28)：あなたは自分の意見を、学級会などで伝えることができますか。
選 択 肢：ア）しっかりできる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

自己表現力 28 ＼ 適応力	ア	イ	ウ	エ	合計
ア	2.1	2.9	1.3	0.3	6.6
イ	2.8	12.9	6.5	1.3	23.5
ウ	**2.1**	**17.7**	21.2	3.2	44.2
エ	**1.1**	**5.1**	12.6	7.1	25.9
合計	8.1	38.6	41.6	11.9	100.



＜表＞
・自己表現力も高く適応力も高い生徒（　　）は約 21 %、自己表現力は高いが適応力の低い生徒（斜体数字）は約 9 %である。自己表現力も低く適応 力も低い生徒（中抜き数字）は約 44 %である。
・ 自己表現力の低い生徒（　　約 70 %）の中で適 応力がある生徒（太数字 26 %）は約 37 %（26/70)、低い生徒は約 63 %(44/70)である。
・自己表現力が低く(ｴ)、適応力も低い(ｴ)生徒は全体の 7.1 %と他の項目の相関と比較しても高い数値となっている。
＜グラフ＞
・適応力の(ｱ)「できる」について見てみると、自己表現力の高い(ｱ)では 32.0 %、自己表現力の低い(ｴ)では 4.1 %と 27.9 ポイントの差が見られる。
・適応力の(ｴ)「できない」について見てみると、自己表現力の高い(ｱ)では 5.0 %、自己表現力の低い(ｴ)では 27.4 %と 22.4 ポイントの差が見られる。

〔相関の特徴〕
＊適応力の有無にかかわらず私的な場での自己表現力は高い。しかし、適応力があるほど公的な場における自己表現力の低下の割合は少ない。
＊適応力があり、私的な場での自己表現力が低いという生徒は少ない。また、自己表現力の度合いが高ければ高いほど適応力を感じる比率も高い。
＊公的な場での自己表現力が低い生徒には、適応力も低いという生徒が多い。

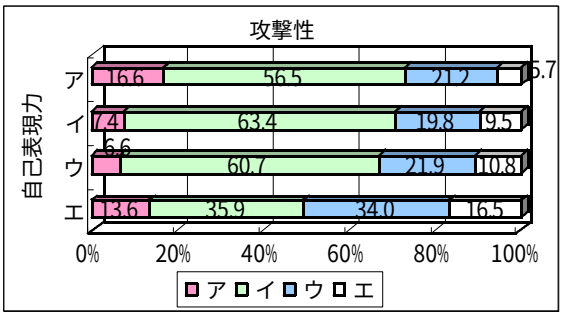
(6) ＜自己表現力＞と＜攻撃性(22)＞の相関の特徴

設問(22)：あなたはむしゃくしゃしたり、腹が立ったりすると、他人や物にあたりたくなりますか。
選 択 肢：ア）ぜったいならない　イ）なることもある　ウ）よくなる　エ）分からない

ア　＜自己表現力(11)（私的な場）＞と＜攻撃性(22)＞

設問(11)：あなたは自分の気持ちや意見を、家族や友人など親しい人に伝えることができますか。
選 択 肢：ア）しっかりできる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

自己表現力 11	攻撃性 ア	イ	ウ	エ	合計
ア	3.0	*10.3*	*3.9*	1.0	18.2
イ	3.9	*33.3*	*10.4*	4.9	52.5
ウ	**1.5**	13.7	4.9	2.5	22.6
エ	**0.9**	2.4	2.3	1.1	6.7
合計	9.3	59.7	21.5	9.5	100

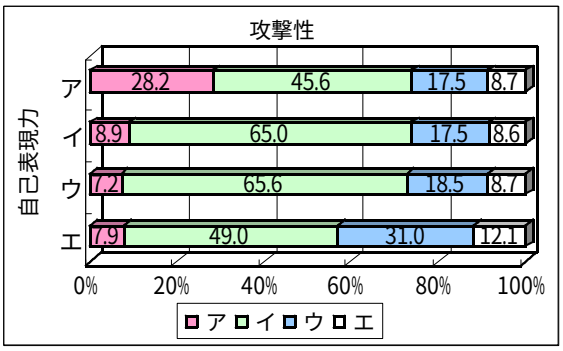


＜表＞
・自己表現力が高く攻撃性の低い生徒（　　）は全体の約 7 %、自己表現力が高く攻撃性の高い生徒　（斜体数字）は約 58 %である。
・自己表現力が低く攻撃性は低い生徒（太数字）は全体の約 2 %、自己表現力が低く攻撃性も高い生徒（中抜き数字）は約 23 %である。
＜グラフ＞
・攻撃性の(ｳ)「よくなる」ついて見てみると、自己表現力が高い(ｱ)では 21.2 %、自己表現力が低い(ｴ)の中で見ると 34.0 %であり、その差は 12.8 ポイントである。

イ　＜自己表現力(28)（公的な場）＞と＜攻撃性(22)＞

設問(28)：あなたは自分の意見を、学級会などで伝えることができますか。
選 択 肢：ア）しっかりできる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

自己表現力 28	攻撃性 ア	イ	ウ	エ	合計
ア	1.9	*3.1*	*1.2*	0.6	6.8
イ	2.1	*15.4*	*4.2*	2.1	23.8
ウ	**3.2**	29.4	8.3	3.9	44.8
エ	**2.1**	13.1	8.3	3.2	26.7
合計	9.3	61.0	22.0	9.8	102



＜表＞
・自己表現力が高く攻撃性の低い生徒（　　）は全体の 4 %、自己表現力が高く攻撃性の高い生徒　（斜体数字）は約 24 %である。
・自己表現力が低く攻撃性の低い生徒（太数字）は全体の約 5 %、自己表現力が低く攻撃性の高い生徒　（中抜き数字）は約 59 %である。
＜グラフ＞
・攻撃性の(ｱ)「ぜったいならない」について見てみると、自己表現力の高い(ｱ)の中では 28.2 %、自己表現力の低い(ｴ)では 7.9 %であり、20.3 ポイントの差が見られる。
・攻撃性の(ｳ)「よくなる」について見てみると、自己表現力の高い(ｱ)の中では 17.5 %、自己表現力の低い(ｴ)では 31.0 %であり、13.5 ポイントの差が見られる。

〔相関の特徴〕
＊自己表現力のあるなしにかかわらず全体的に攻撃性は高い。

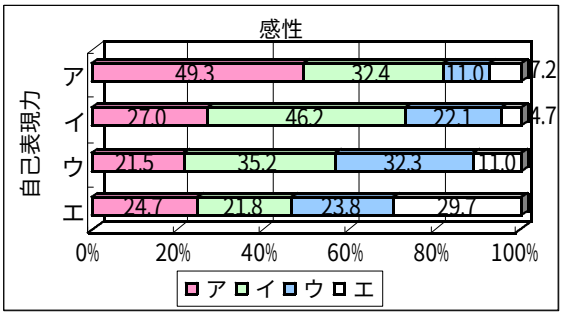
(7) ＜自己表現力＞と＜感性(24)＞の相関の特徴

設問(24)：あなたは美しいものを見たり、読書や映画を鑑賞すると心が動かされることがありますか。
選 択 肢：ア）かなりある　イ）ある　ウ）あまりない　エ）ない

ア　＜自己表現力(11)（私的な場）＞と＜感性(24)＞

設問(11)：あなたは自分の気持ちや意見を、家族や友人など親しい人に伝えることができますか。
選 択 肢：ア）しっかりできる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

自己表現力11 ＼ 感性	ア	イ	ウ	エ	合計
ア	9.4	5.4	2.1	1.4	18.3
イ	14.1	24.0	11.5	2.4	52.0
ウ	**4.9**	**7.9**	7.3	2.5	22.6
エ	**1.6**	**1.4**	1.6	2.0	6.6
合計	30.0	38.7	22.5	8.3	99.5



＜表＞

- 自己表現力も高く感性も高い生徒（　）は全体の約 53 %、自己表現力は高いが感性が低い生徒（斜体数字）は約 17 %である。
- 自己表現力は低いが感性の高い生徒（太数字）は、全体の約 16 %、自己表現力も低く感性も低い生徒（中抜き数字）は約 13 %である。
- 自己表現力の高い生徒は全体で約 70 %（　）、その中で感性の高い生徒は約 76 %(53/70)である。自己表現力の低い生徒は全体で約 29 %（　）、その中で感性の高い生徒は約 55 %(16/39)である。

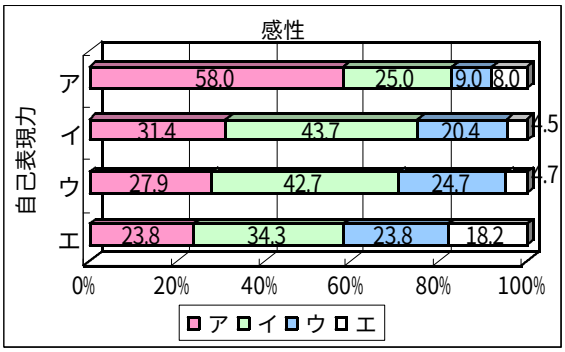
＜グラフ＞

- 感性の(ｳ)「あまりない」(ｴ)「ない」について見てみると、自己表現力の高い(ｱ)の中では 18.2 %、自己表現力の低い(ｴ)は 53.5 %と 35.3 ポイントの差が見られる。
- 感性の(ｱ)「かなりある」(ｲ)「ある」について見てみると、自己表現力の高い(ｱ)の中では 81.7 %、自己表現力の低い(ｴ)は 46.5 %と 35.2 ポイントの差が見られる。

イ　＜自己表現力(28)（公的な場）＞と＜感性(24)＞

設問(28)：あなたは自分の意見を、学級会などで伝えることができますか。
選 択 肢：ア）しっかりできる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

自己表現力28 ＼ 感性	ア	イ	ウ	エ	合計
ア	3.8	1.7	0.6	0.5	6.6
イ	7.4	10.3	4.8	1.0	23.5
ウ	**12.5**	**19.1**	11.0	2.1	44.7
エ	**6.1**	**8.8**	6.1	4.7	25.7
合計	29.8	39.9	22.5	8.3	100.



＜表＞

- 自己表現力も高く感性も高い生徒（　）は全体で 23 %、自己表現力は高いが感性の低い生徒（斜体数字）は 7 %である。自己表現力は低いが感性の高い生徒（太数字）は 47 %である。
- 自己表現力も低く感性も低い生徒（中抜き数字）は全体の 24 %である。
- 自己表現力の高い生徒は全体で約 30 %（　）、その中で感性の高い生徒は約 77 %(23/30)である。自己表現力の低い生徒は全体で約 70 %（　）、その中で感性の高い生徒は約 67 %(47/70)である。

＜グラフ＞

- 感性の(ｱ)「かなりある」について見てみると、自己表現力の高い(ｱ)の中では 58.0 %、自己表現力の低い(ｴ)では 23.8 %と 34.2 ポイントの差が見られる。
- 感性の(ｴ)「ない」については、自己表現力の高い(ｱ)の中では 8.0 %、自己表現力の低い(ｴ)では 18.2 %と 10.2 ポイントの差が見られる。

〔相関の関係〕
＊私的な場における自己表現力が高い生徒は、感性も高い傾向にある。また公的な場での自己表現が高い生徒も同様なことが言える。
＊公的な場における自己表現力が低くても、「感性」は高い生徒が多い。

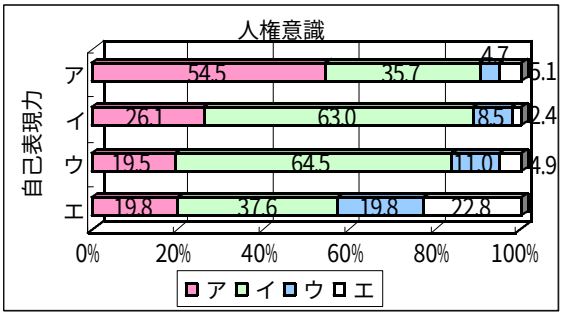
(8)　＜自己表現力＞と＜人権意識(30)＞の（相関）関係

設問(30)：あなたは自分と同じように他の人も大切であると思いますか。
選 択 肢：ア）たいへん思う　　イ）思う　　ウ）あまり思わない　　エ）思わない

ア　＜自己表現力(11)（私的な場）＞と＜人権意識(30)＞

設問(11)：あなたは自分の気持ちや意見を、家族や友人など親しい人に伝えることができますか。
選 択 肢：ア）しっかりできる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

自己表現力11 ＼ 人権意識	ア	イ	ウ	エ	合計
ア	9.9	6.5	0.9	0.9	18.2
イ	13.5	32.6	4.4	1.3	51.8
ウ	**4.4**	**14.6**	2.5	1.1	22.6
エ	**1.3**	**2.5**	1.3	1.5	6.6
合計	29.1	56.2	9.1	4.8	99.2



＜表＞

・自己表現力も高く人権意識も高い生徒（　　）は全体の約 63 %、自己表現力も低く人権意識も低い生徒（中抜き数字）は約 6 %である。
・自己表現力は低いが人権意識の高い生徒（太数字）は約 23 %、自己表現力は高いが人権意識の低い生徒（斜体数字）は約 8 %である。
・自己表現力の低い生徒は全体の約 29 %（　　）であるが、その中の 79 %（23/29）は人権意識の　高い生徒である。

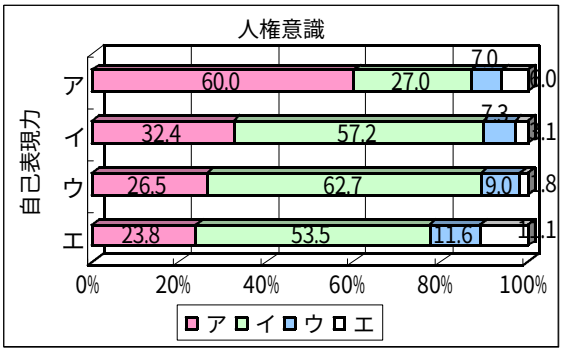
＜グラフ＞

・自己表現の高い(ｱ)の中で、人権意識の(ｱ)「たいへん思う」と回答したのは 54.5 %である。自己表現の低い(ｴ)の中では 19.8 %であり、37.4 %の差が見られる。
・自己表現力の高い(ｱ)の中で、人権意識の(ｴ)「思わない」と回答したのは 5.1 %である。自己表現の低い(ｴ)では 22.8 %であり、17.7 ポイントの差が見られる

イ　＜自己表現力(28)（公的な場）＞と＜人権意識(30)＞

設問(28)：あなたは自分の意見を、学級会などで伝えることができますか。
選 択 肢：ア）しっかりできる　イ）できる　ウ）あまりできない　エ）できない

自己表現力28 ＼ 人権意識	ア	イ	ウ	エ	合計
ア	4.0	1.8	0.5	0.4	6.7
イ	7.6	13.4	1.7	0.7	23.4
ウ	**11.6**	**27.5**	4.0	0.8	43.9
エ	**6.1**	**13.6**	3.0	2.8	25.5
	29.3	56.3	9.2	4.7	99.5



＜表＞

・自己表現力も高く人権意識も高い生徒（　　）は全体の約 27 %、自己表現力は低いが人権意識の高い生徒（太数字）は約 59 %である。
・自己表現力も低く人権意識も低い生徒（中抜き数字）は、全体の約 11 %である。
・自己表現力が低い生徒は全体の約 69 %（　　）であるが、その中の約 86 %(59/69)は人権意識が高い。

＜グラフ＞

・自己表現力が高い(ｱ)の中で人権意識の(ｱ)「たいへん思う」と回答したのは 60.0 %、自己表現力の低い(ｴ)では 23.8 %であり、36.2 ポイントの差が見られる。
・自己表現力の高い(ｱ)の中で人権意識の(ｴ)「思わない」と回答したのは 6.0 %、自己表現力の低い(ｴ)では 11.1 %であり、5.1 ポイントの差が見られる。

〔相関の特徴〕
＊自己表現力が低くても、人権意識が高い生徒も多く、自己表現力の有無にかかわらず、全体の人権意識は高い。

4　アンケート調査のまとめ

○ 学校生活において**自己存在感**を感じている生徒は 18.7%にとどまり、80%以上の生徒が自己存在感を感じていないと回答していることは、我々教育にたずさわる者に対する子どもからの大きな警鐘であると思います。

　また、家庭においても自分を発揮できていると感じている割合が半数に満たない状況であり、教師は生徒の家庭生活についても十分に把握した上で、指導する必要があります。

○ **自尊感情**については、自分に自信がないと回答している割合が 67.7%であり、他者との関係の中で自分が認められ、成就感や達成感をもつ機会が少ない中学生の姿が見られます。

○ **自己表現力**については、私的な場である家族や友人など親しい人には自分の気持ちや意見を伝えることが比較的できていますが、公的な場である学級会などある程度「緊張」「防衛」が作用する場においては、多くの生徒が自分を表現することができないという結果がでています。中学生という時期は自意識が高まるとともに、「他からの視線」に対する意識も高まってきます。他人を強く意識せざるを得ない場面では、なかなか自分を表現できないという状況がうかがえます。自己表現力を高めるためには、心を開き、自分の思いや考えを素直に表出できる活動や場を意識的に設定することが必要であると考えられます。

　他人の意見を尊重しながら自分の意見を述べることについても、できないと回答した割合が高くなっています。他人の意見を尊重することが、共感的な場をつくり、自己表現を促すことにつながるという視点を、教師自身が再認識し、生徒への指導・援助を進めていくことが必要です。

○ **自己表現力と自己存在感との関連**をみてみますと、公的な場での自己表現力が高い生徒の 32%強が、学校生活において自己存在感を感じています。これは決して高い割合とは言えませんが、全体の自己存在感を感じている割合（18.6%）と比較すれば、高い傾向がみられます。自分の力を発揮することは、自分の思いや考えを表現できる自信や支えとなり、それがさらに自己存在感を高めるものと考えます。

○ **自己表現力と自尊感情との関連**では、公的な場での自己表現力が高い生徒の中で「自分のよさが分かっている」と答えている割合（66 %）は、自己表現力の低い生徒の中で「自分のよさが分かっている」と答えている割合（48 %）と比較して高くなっています。自分の考えや思いを表現することは、自己理解を深め、自己の価値を認識することにつながっていると考えられます。

○ アンケートの分析から、**自己存在感・自尊感情と自己表現力には、強い結びつきが見られます**。自尊感情や自己存在感が感じられるような場においては、自己を表出しやすく、自己表現力の育成が図られると考えられます。また、自己表現力が高まることで、自尊感情が育ち、自己存在感を感じることができるのではないかと考えられます。

第４節　自己表現力の育成に向けて

１　自他を大切にした自己表現力が育つ場

(1) 自己表現にかかわる生徒の現状

生徒一人一人が社会の中で自己実現しながら生きていくためには、自己をみつめ、陶冶し、他者との交流を通して自己理解・他者理解を深めるために不可欠な自己表現力を身に付けることが必要です。しかし、自己表現力をはぐくもうとする時、課題となることがあります。それは、思春期の特徴としての側面と現代の若者の特徴としての側面から考えられるものです。

自己表現にかかわる思春期の特徴として、自尊感情が過敏になるため、自分を傷つけられまいとする自己防衛的傾向や羞恥心から自己表出に対して閉鎖的になったり、自己の弱点を補うために実際以上に自分をよくみせたいという自己顕示欲が強まったりすることなどがあげられます。また、自己の主張を絶対視したりする傾向もあり、これらのことからありのままの自分を受容し、肯定し、前向きに生きようする意欲、それを支える適切な自尊感情を育てることが課題となっています。

一方、現代の若者の特徴としては、ストレス社会における希薄な人間関係に起因する表層的な自己表現があります。そこには、集団の和を第一とする国民性や、他人と同じであろうとする日本的競争社会が生み出した画一性を志向する価値の一元化現象と、欧米化によってもたらされた個性尊重、情報化による価値観の多様化という二面性が反映されています。この二面性は成熟していない子どもの内面に混乱を生み、「群」といわれる同質志向をもちながらも、実態としては個々バラバラという表層的な人間関係を生み、それが不安定な言動につながっていると考えられます。つまり、過剰な競争に追い立てられ、周囲を気にしすぎて対人関係に疲れ、自信をなくした現代の大人と同様に、本心を語れない子どもが増えています。

本気で自分の意思や感情を伝え合ったり、深く理解したり、共感したりすることができず、自分の内面に立ち入らせないかわりに、相手の内面にも立ち入らず表層部分でしか人と交われないという実態が見られます。また、深く考えることが苦手で感情も陶冶されておらず、衝動的、短絡的言動や自分の殻への閉じこもりも目立っています。

さらに親の養育態度の変化によって、発達段階における第一次反抗期やギャングエイジといわれる時期に自己主張を経験せず、内面を語ることができない子どもが増え、それが様々な問題的行動につながっているという指摘もあります。これらの状況を考える時、一人一人の違いを認め、個性を尊重し、安心して自分の心を語ることができる場を学校や家庭、社会の中につくりあげることが喫緊の課題であると思います。

(2)　自己表現を可能にするには

思春期と現代社会という二つの要素が相乗的に作用した課題を背負っている今日の子どもたちに、適切な自己表現力を育てるための方法を具体的に考えてみることにします。その第１の手だては、子どもの思春期の特徴や社会的背景を踏まえ、まず抵抗なく自己表出できる条件をつくっていくことではないかと考えます。

そのためには、子どもたちが自分自身を見つめようとする意欲や自尊感情を高め、自己肯定感をもたせることが必要です。人には誰も語りたい思いや考え、表現せずにはいられないことがあります。自分の思いを受けとめてくれる場があれば、自分の心が開き、自然に自己表出したいという気持ちが高まり、言葉や身体表現をはじめとする様々な表現方法は育っていきます。自己表出するのに抵抗が少ない場であれば、自己表現は可能になります。つまり、心が開かれ

る場、自己肯定感がもて、共感的理解が得られる場づくりが必要です。自分が心を寄せているもの、関心を寄せているものに対する共感、受容的雰囲気のある心が開かれる場をつくらなければならないと考えます。「『寒いね』と話しかければ『寒いね』と答える人のいるあたたかさ」（俵万智『サラダ記念日』）という短歌に見られるような心の琴線にふれる響きあい、触れ合いは、「感受したものに対する適切な表現」や「人と人とを結びつける言葉」の発達に結び付きます。

(3) 自己表現が可能になる場

では、具体的には自己表現が可能になるために、どのような場が必要なのでしょうか。ここでは反対に自己表現しにくい場について、現代の子どもたちが背負っている問題を象徴しているいじめや不適応が起こりやすい学級や集団の特徴と比較し、考えてみたいと思います。

〔いじめ・不適応がおこりやすい場の特徴〕

① 一人一人が大切にされていない、互いが認められていない
② 攻撃的雰囲気がある
③ 規範意識が低い
④ 異質なものを排除しようとする傾向が強い
⑤ 思いやりの意識が低い
⑥ 不まじめ・おもしろ志向が強い
⑦ 対立集団がある、孤立する子がいる
⑧ 競争意識が高い
⑨ 教師との信頼関係が薄い
⑩ 正義が通りにくい、人権意識が低い

いじめ・不適応がおこりやすい場では、上に述べたような特徴が複合的に見られます。自己表現が十分できない場といじめ・不適応がおこりやすい場は、その性格が類似しているように思われます。一人一人の自己存在感が低く、共感的人間関係が育たず、人権尊重の意識や規範意識が低い場では、自己表現に必要な「心を開く」ことはできません。自分の思いを表出できないために、反対に自己存在感や共感的理解を十分得ることができずにストレスが高まり、攻撃的雰囲気をつくることにつながってしまいます。自己表現が十分できる場は、安心して生き生きと自分を出すことができ、伸ばしていける学級や学校、心の居場所のある場です。

そこで、自己表現が十分できる場については、次のようにまとめられるのではないかと考えます。

自己表現を可能にする場〕

・自己存在感、自己肯定感が味わえる場
・一人一人が認められ、共感的な人間関係が育てられる受容性の高い場
・正義感が発揮できる規範意識の高い場
・主体的に課題解決にのぞめ、自己決定が十分できる場
・思いやり、人の痛みがわかる優しさの育つ人間尊重の意識の高い場

(4) 自尊感情を高めるために

こうした場をつくるためには、自己存在感、自己肯定感のもととなる自尊感情を高めていくことが必要です。前節の調査でも明らかなように、中学生の自尊感情は小学生や高校生に比べて約１割程度低いという結果が出ています。思春期のただ中にある中学生は、自己像が不明確で自分に自信がもてないという特徴があります。また、中学校での学習内容や生活の大きな変化に適応できず、こんなはずではなかったという自信喪失や、他者との比較による自己卑下もおこってきます。さらに非共感的な人間関係の中にある場合は、自己の殻を閉ざし、自信を取り戻せないという堂々めぐりの状況が起きます。自分をまるごと受け入れ、「Ｉａｍ ＯＫ」といえる場を中学校の生活の中にどれだけつくることができるのかが大きな課題であると考えます。

次に、自己表現力をはぐくむためには、自尊感情や自己存在感を育てることと同時に、共感的な人間関係や場をつくることが必要です。自尊感情は豊かな人間関係や経験、体験の中で高められると前にも述べたように、自尊感情を育てる基盤が同時に共感的な関係や場をつくる基盤にもなると考えます。

ア 自尊感情を高め、共感的人間関係をつくる場づくり

人間関係も親密で、休憩や放課後の時間などが比較的ゆったり流れていた小学校の生活とは違い、中学生の生活は非常に忙しくなります。この忙しさによって精神的なゆとりをもてず、心の安らぎや落ち着きをもてない中学生は少なくありません。自尊感情を高めるためには、学校生活に無理なく適応でき、心の安らぎが得られ、心の居場所となる精神的にゆとりのある場をつくることが非常に大切です。そして、この心の居場所づくりと同時に一人一人の生徒が自己肯定感や自己存在感を味わえる場づくりを、発達段階や生徒の実態に応じて、各学年ごとに行うための細かな指導計画が必要になります。

どの学校でも、入学時のオリエンテーションや学級における組織づくり、人間関係づくりなど熱心な取組が見られますが、ややもすると学年や学級担任任せになってしまい、学校としての共通の目標に基づく計画的・組織的な取組となっていないきらいがあります。中学校生活に適応するための十分なガイダンスを小学校と連携し、入学前から系統的・組織的に取り組むことが必要です。精神的なゆとりがもてる場づくりは学校の教育活動全ての面において、「教育環境づくり」、「人間関係の基盤づくり」として行われる必要があります。ここでは、そうした場づくりの際の留意すべき点を各学年ごとに述べてみたいと思います。

【第 1学年における留意点】

まず、中学校に入学した直後の希望に満ちた感情や意欲をもった生徒が学校生活の変化に戸惑い、不適応感を感じ始める時期にどう対応し、どのような手だてを講じていくかを考えることが必要です。とりわけ学校生活の大部分を占める教科の授業時間において、自尊感情を大切にしていくことが重要となります。教科担任制のよさを一層生かし、多数の目で子どもたちを見るとともに、一人一人の生徒の状況を密に連絡しあい、生徒のよさや可能性を引き出す細やかで温かい指導と評価が必要です。また、教科の授業にとどまらず生徒が生活する教室に共感的な人間関係を生み出すことが重要です。グループ・エンカウンターやピア・カウンセリングなど共感的な関係を作り上げるための手法を、特別活動や道徳の時間をはじめ様々な活動に積極的に取り入れていくことも大切です。

なにより心が開かれる共感的な人間関係は、まず教師の醸し出す人間性や倫理観、受容的な雰囲気や態度が基本になります。内面をゆさぶられる感動体験を教師と生徒そして生徒同士が

分かち合い、互いに「Ｉ am ＯＫ． You are ＯＫ.」といえる関係を結べるようにすることが大切です。このような豊かな人間関係の中でこそ、生徒は安心して自己を開くことができ、自己存在感を得ることができます。

第 2学年における留意点】

第２学年は、いわゆる第二反抗期の頂点といわれ、自他の否定が顕著になり、自分自身の情動をコントロールできない時期になりがちです。一方自我が成長し、自己を見つめる意識が高まる時期でもあります。この時期には正しい自己認識を促し、適切な自尊感情を形成することが大切です。学年が進むに従い、学習内容の難しさにより一層自己卑下したり、意欲を低下させてしまう生徒も多くなります。そこで、授業の在り方はますます重要になってきます。学習意欲の基本となる「分かること」「学ぶ喜びと楽しさ」が実感できる指導を、各教科の十分な連携の下に、計画的・組織的に取り組むことが必要です。

一方、調査の結果にもあるように、学習とは違う面で学校生活の楽しさを見いだしている生徒や学校生活は楽しいけれど自尊感情をもてない生徒の数も少なくありません。この時期には、自尊感情を高める取組を授業改善の中で進めるとともに、個々の生徒に対してクラブ活動や生徒会活動、学級活動などにおいて様々な活動の場を設定し、一人一人の生徒が自分の役割を果たすことに力を発揮し、自信や効力感、存在感を味わえる体験を積み重ねるようにすることが大切です。その時、一人一人の生徒が試行錯誤しながらも役割を遂行できるように、適切な時期に適切な支援をすることが求められます。

第 3学年における留意点】

最高学年となり、大部分の生徒が学校生活に適応できるようになる一方、中学卒業後の進路決定（進学、就職等）やそのための学習を意識し、抑圧感が強まる時期です。同時に、進路について考え、進路選択を自己確立のための一つのステップとして捉えようとする中で、自分自身を客観的に見つめる力が育ってくる時期でもあります。自分自身のこれまでの在り方生き方を振り返らせることが大切です。その際、自分にとって積極的に評価のできることを思い起こさせることによって、自分のよさや可能性に気付かせ、自己肯定感をもたせることが大切です。同時に、自分のよさや可能性を土台として、自分の将来の在り方や生き方を考えさせていくことも大切です。学習に関してはますます不適応感をもつ生徒もでてきます。生徒一人一人の抱える不安に耳を傾け、自己の展望をもたせることを意図した指導が必要です。

以上、自尊感情を育てるために、各学年において留意すべき点を述べてきましたが、全学年に共通するポイントをまとめると次の４点に集約されると考えます。

① 教師の肯定態度	・・生徒への肯定的見方、受容的態度、多元的な眼差しによる指導と評価により、生徒に自己肯定感を与える。
② 学習への適応を促す	・・個を生かし個に応じた学習や小集団学習における協力的な学習を通して達成感や充実感を味わわせ、同時に学習集団における人間関係に関して肯定的自己を育てる。
③ 役割達成感をもたせる	・・一人一人の生徒に役割をもたせ、役割遂行の過程を支援し、他からの承認を得ることを通して自尊感情を高める。
④ 自己への振り返を促す	・・自分の積極的な面を見つけだし、自己効力感や肯定感を再認識し、自己の良さや可能性を土台にした意欲を高める。

なによりも教師が生徒一人一人の伸びようとする潜在的な力を信頼し、指導の展望と指導のポイントを把握し、長いスパン（期間）で自尊感情を育てようとする支援を意図的・継続的に行う前向きな姿勢をもち続けることが必要です。

しかし、留意しなければならないことがあります。育てるべき自尊感情は、うぬぼれや自己への過大評価などの「肥大化した自我意識」ではなく、適切な自尊感情でなくてはなりません。自尊感情は「自分はかけがえのない存在である」という実感、「自分には価値がある」という実感など自己への基本的な信頼感の総和です。幼児期からの自尊感情の育ちを基盤にし、思春期の課題を見据え、一人一人の生徒に応じた指導や支援を行うことが大切です。また、学校の教育活動の全体を通して、適切な自尊感情を高める視点を貫いていくことが重要です。

イ 表現活動を活発にする場づくり

こうした自尊感情や共感的な人間関係が育つ場を設けることによって、自己表現が抵抗なくできる条件が整ってきます。しかし、この基盤となる場づくりの他に自己表現力をさらに高めていくためのスキル（技能）を養う場づくりも必要です。自己表現せずにいられない場、自己表現を促す場を教育活動のあらゆる機会に設定することが大切です。

(ｱ) 感動表出を促す場づくり

教科の授業はもちろん、道徳、特別活動、総合的な学習の時間において、自己表現を促す取組を計画的・系統的に組織していくことが大切です。

心が開放される場が設定されたとしても、自己表現力は自然に育っていくものではありません。人は心が動かされたり、震えたりする体験や経験に出会うと、その感動や思いを何らかの形で表現しようとします。豊かな体験や経験を積み重ねる中で、表現への意欲を高めていくことが大切です。表現することは、自己を見つめ、さらに内面を適切に表現する力を養うことにつながっています。豊かな体験、経験が豊かな感性をはぐくむことは周知のことですが、感性を一層磨くためにも、感動体験を表現活動に結びつけることが求められます。

教科、道徳、特別活動の中では、それぞれ固有の指導目標に沿った自己表現力を高めることはいうまでもありませんが、「また作文か」「また合唱か」「また絵か」といった生徒の押しつけられ感覚を拭い去り、生徒の内面表出を促すことを大切な視点として、表現形態を自分で決めさせるような取組も必要です。

例えば、福祉体験をレポートする時、一人一人の生徒の興味・関心に基づく表現方法や得意とする様々な自己表現の形態を選択して発表したり、国語の授業において、言語表現だけにかかわらず、それを基本としておきながらも、音楽や身体表現などを用いた表現活動に取り組んだりすることです。こうした場を日常の活動の中で意図的・計画的につくり出すことが大切です。

(ｲ) 内省を促す場づくり

前述した様々な要因によって、生徒は硬い心の殻の中で自分を直視することを避けようとする傾向にあります。しかし、自ら自己を語らなくとも、心に響くものを求めたり、共感したりする鋭敏な感受性を備えています。この感受性に依拠し、自分の内面をみつめ、自分を表現し、自分の可能性を発揮するために、自分に素直に向き合い、心の扉を開き、たくましくしなやかな心を育てる場が必要です。自己表出し、自己理解や他者理解を促すのは感動体験の場だけではありません。日常のなにげない生活の中でも自分を表現するこことによって、自己を見つめることはできるのです。

例えば、週に１回、心に残った出来事や思いを綴る「マイ・ノート」に取り組むことによっ

て自分を振り返る場をつくることも可能です。その際、教師からの返信をていねいに続けることによって心の交流を図るとともに、客観的に内面を見つめる視点の在り方を支援することができます。

(ｳ) 他者理解を促す場作り

私たちが求める自己表現力には、他者との交流を図り自己理解・他者理解を進めるコミュニケーション能力が含まれます。それは、単なる自己主張や私的な関係の中での勝手な「おしゃべり」ではなく、言語コミュニケーションであれ、非言語コミュニケーションであれ、相手の立場を尊重しながら自分の思いや考えを表したり述べたり、相手の思いを理解できるコミュニケーション能力でもあります。こうしたコミュニケーションを活発に進める場を設定することによって、伝達や話し合い活動の基本や形式を学び、自分の思いや考えを表出する経験を段階的に積み重ねていくことが必要です。特に、自己防衛意識が強まるこの時期は、形式的なコミュニケーションは比較的スムーズにできますが、自分の内面に触れるようなコミュニケーションをスムーズに行える場を学校生活の中に意図的・計画的に設定することが大切です。

例えば、話し合い活動を行う場合も、話しやすい形態を工夫したり、話し合いの方法の指導によって、少人数による話し合いからディベートのような比較的多数の話し合いの場を設定したりします。その際、互いの意見を自分の内面に取り入れ吟味する姿勢をもって参加することを促し、他者理解・自己理解を深める視点を身につけるように支援することが大切です。

自己表現力を高めることは、豊かな自己実現を図るとともに、社会人として豊かな人間関係を結ぶために必要なことです。これまで自己表現を促す場づくりと自己表現力を高める場づくりの両面について考えてきましたが、こうした場の設定だけでは、自己表現力は育ちません。場の設定とともに　自己表現能力そのものをどう高めるかが不可欠です。そこで、次に、自己表現力を高めるための方法について考えてみることにします。

2　自他を大切にした自己表現を育てる活動

学力観の見直しを図った現行の学習指導要領は、学習における「意欲」を重視するとともに、学習活動における「表現」の意義を協調しています。このことは、学習の過程を、「意欲」から出発し、心豊かに、主体的・創造的に「表現」することを通して自己実現へと向かう活動として捉えたものと考えることができます。しかし、平成５年度から平成７年度にかけて文部省が行った調査は、「自ら調べ判断し、自分なりの考えをもちそれを表現する力」がなお十分育っていないことを課題の一つとしてあげています。そのため、21 世紀を主体的に生きる国民の育成を目指す次期学習指導要領でも、「子どもたちが自分で考え、自分の考えをもち、それを自分の言葉で表現することができるような力」の育成を重視した指導の一層の推進が改めて強調されてます。「表現力」の育成は、まさに、学校教育の今日的課題の一つであると言ってもよいでしょ

本研究では「自己表現力」を、まず、「子どもたちが自分で考え、自分の考えをもち、それを自分の言葉で表現することができるような力」、そして、「自分の考えや思いを交流する力」として捉えることとしました。そして、「表現」は単なる感情の発露としての「表出」ではなく、自己実現を目指すための過程で育成されるものと考えてきました。ここでは、上に述べた意味での「自己表現力」を育てるための活動について述べていきますが、その際、次の二つのことを念頭において考えることとします。

その一つ目は、あくまでも一人一人の子どもたちの思いや考えから出発し、豊かな「自己表現」を可能にする在り方を考えていくことです。

二つ目は、「表現」を言語表現に限定することなく、様々な表現について考えていくことです。つまり、上記の「自分の言葉」を様々な表現媒体の総称としての「言葉」、自分の言葉としての「絵」や「音楽」、「身体表現」等と考えます。こう考えることによって、様々な個性を生かした豊かな表現に迫ることができるものと考えます。

(1) 自分の思いや考えを表現しようとするために

> 外界との接触によって生じた「内なるもの」を、人間はなぜ心の中に止めておかず、自分の外に表そうとするのか。それは、自分の存在を確認したいからである。外に出せば、自分の心を自分で眺めることができる。自分の心が客観化でき、自分の存在が確認できるのである。
>
> （ 小島律子・澤田篤子編「音楽による表現の教育」、晃洋書房 ）

上の文章は、自分の思いや考えを客観化することの意味と、そのために「表現」が果たす役割について述べたものです。表現についてのこの理論を基に、互いに「友だちの目」を意識し、なかなか自分の思いや考えを率直に表現出来ない中学生が、どうすれば「表現しよう」という気持ちをもつことができるかについて考えてみることにします。

上記の「外界」を教材やその提示の方法も含めた「学習活動」に、「内なるもの」を「自分の思いや考え」と置き換えてみます。子どもたちに自己表現を促すためには、「学習活動」は「友だちの目」に対する不安感を乗り越えさせるだけの興味・関心を生じさせなければなりません。しかもそれは、単なる興味・関心の域を越え、「これなら自分にもできるぞ」という見通しをもたせ、表現への意欲を喚起するものでなければなりません。言い換えれば、「学習活動」が

① 知的好奇心や探求心を刺激して「いいな」「やりたいな」と感じさせ、
② 「今現在の自分」と何らかの「かかわり」をもっており、
③ 自分のもっている資質や能力で「学習」を展開できる「見通し」がもてる

ものであるとき、子どもたちは自分の思いや考えを表現し始めると言えるのではないでしょうか。

このような視点から、子どもたちに表現を促す「学習活動」の条件を次にあげてみました。

- 実生活との関連を図った体験的な活動であること
  （家庭や地域社会での体験や活動を生かした学習活動）
- 家庭や地域社会の人材・施設や様々な活動との連携を図った活動であること
- 興味や関心に応じた課題が選択できるものであること
- 最小限のルールで多くの自由を与える活動であること

上記の条件を考えた授業例を一つあげてみます。次に示すのは、楽器の基本的な奏法や簡単な編曲、表現の工夫等を音楽活動を通して学習した後、その学習体験を生かして合奏曲をつくるという音楽科の実践例です。

【生徒に身近な教材 ･教具 ･学習活動を用いた音楽科の実践例】

1　指導の工夫

・生徒の日常生活に身近な音楽をとりあげ、また、ベースやドラム、コンピュータを教材・教具として用いて、生徒たちの興味・関心を喚起する。

・前次の学習体験を生かすことで学習の連続性を図るとともに、選択肢を取り入れたルールを設け、学習内容をイメージしやすくすることで「見通し」をもたせる。

2　指導の流れ

・第１次：　創作課題を提示し、合奏曲を創るためのルールを確認する。
　　コンピュータを活用して曲づくりをするための基本操作を習得する。

・第２次：　グループごとに、コンピュータを活用し、創作活動を行う。

合奏曲をつくるためのルール】

①合奏曲の各パートやその８小節分のフレーズを担当し、４人グループで合作する。

②コードパートを提示し、メロディー、オブリガート、リズム（打楽器の編成数は自由）、ベースの４パートのいずれかを選択し、担当する。

③曲づくりの手段としては、コンピュータを活用する。

次	時	学習過程	学　習　活　動	指導上の留意点
第１次	1	表現目標の設定	・ｺﾝﾋﾟｭｰﾀを活用し、合作による合奏曲をつくることを知る。	・創作活動へのｲﾒｰｼﾞがもてるよう、既習曲を楽譜や演奏記録で振り返る。
			創作課題 みんなで５パート 32 小節の合奏曲をつくろう。	
	2 3 4		・ｺﾝﾋﾟｭｰﾀの基本操作を知る。 ・ｺﾝﾋﾟｭｰﾀの操作に習熟する。 感想１：「ｺﾝﾋﾟｭｰﾀに挑戦して」	・個人差に留意し、操作の習熟を支援する。 ・操作方法は基本的なｺﾏﾝﾄﾞの提示にとどめる。
第２次	1 2	表現内容の構想及び表現の工夫	・合作による曲づくりの過程とルールを再確認する。 旋律やリズムフレーズづくり（個別）	・既習曲の楽譜の再提示により合奏形態と合作の方法を再認識できるようにする。 ・つくるための試行錯誤が行なわれるよう支援する。

※コンピュータは、自分の音楽表現に気付き、深めるための「振り返り」にも大変有効です。

(2) 表現活動において自分の思いや考えを深めるための活動

「学習活動」の提示によって、考え、表現することを始めた子どもたちが、自分の考えや思いを深めていくためには、自分自身の思いや考え、またその表現の手段や方法について振り返り、考え直す機会を効果的に与えなければなりません。このことは、自分自身の内面を見つめさせる機会、自分自身について多くのことに気付かせるきっかけを与えることであり、自己理解の深化を促します。この振り返りを適切に支援することができれば、繰り返し知的好奇心や探求心を刺激し、自分の思いや考えを意欲的に表現させ、自己実現へと導くことができるのではないでしょうか。

このような「振り返り」、あるいは「反省」の活動は、学習活動においては「学習カード」や「評価票（表）」への記入といった形で行うことが効果的です。その場合、「どこまで振り返るか」、「どのような手段で振り返るか」等に留意することが大切です。したがって、指導者の側においては、どのような目的で、どのような吟味検討（振り返り）をさせ、どのような形での自己認識に至らせるのか、といった点についての検討が必要になります。また、自分自身の内面を見つめ考えさせるために、平素から、例えば読書など、自分自身と豊かに語るための活動を意図的に行っておくことが必要です。

次に示すのは、「在り方生き方」についての自己認識を促すとともに、吟味検討を通して自他の理解を深めることをねらいとした道徳の時間の実践例です。ここでは、「実生活との関連を図った相互理解を目指す体験的な活動」を行い、「感想カード」へまとめることを通して、「自他の認識の在り方そのもの」について気付かせるとともに、自分の思いや考えを深めたり、改めさせたりすることをねらいとしています。

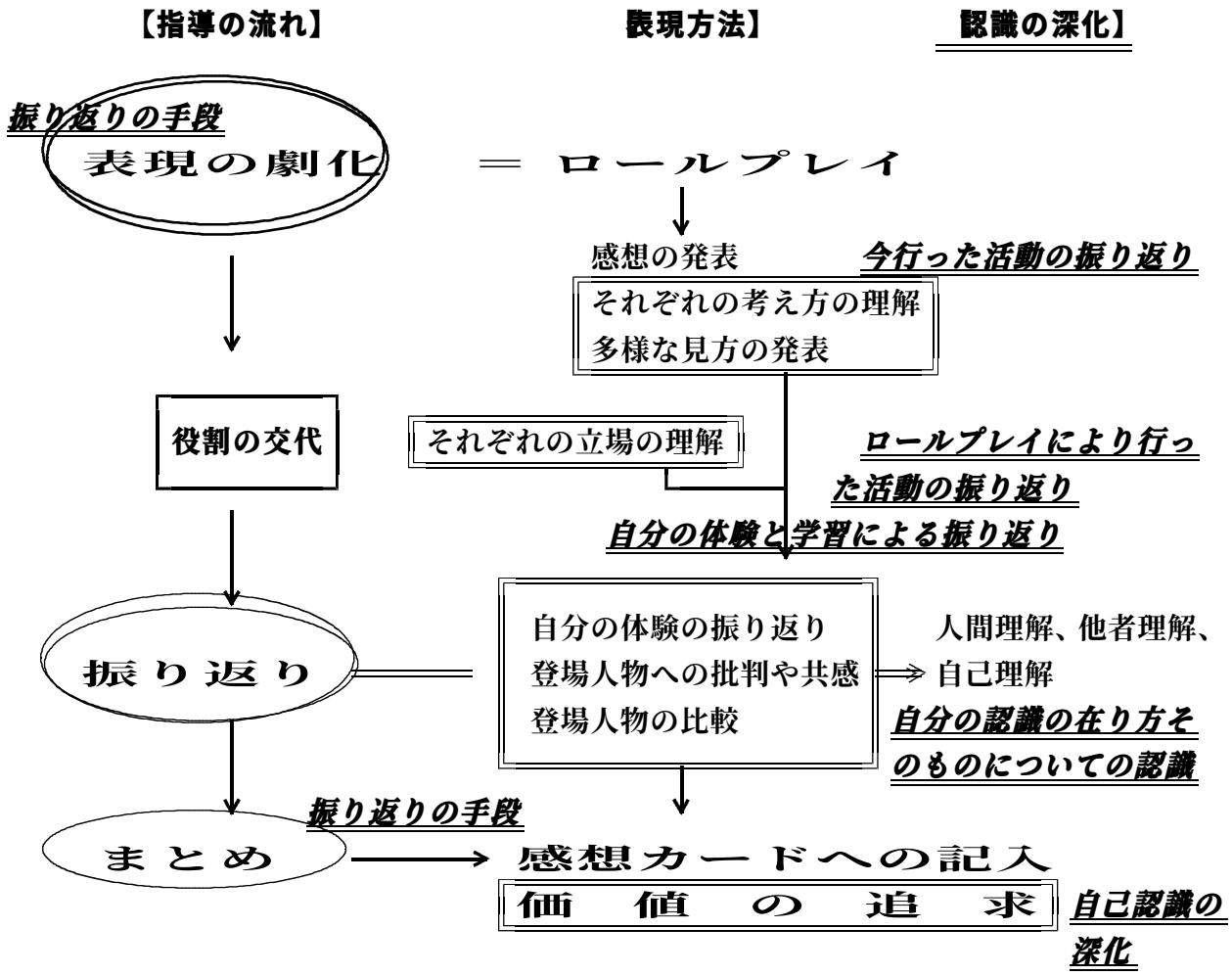
【ロールプレイと自己評価カードを用いた道徳の実践例】

1　指導のねらい

ストレスを感じることの多い学校生活の中で起こりやすいいじめや仲間外れの事例を通じて、他者の立場に立って考えることで、他に対する深い理解と思いやりの心を育てることをねらいとします。

2　指導の流れ

ありのままの自分の姿を率直に見つめることにより、互いに自己中心的になりがちな日常的傾向を自覚させる。また、相手への思いやりを欠く行動について話し合わせることで、互いの立場を理解させ、他に対する共感的理解や思いやりの大切さや、自分自身の課題の克服について気付かせます。



(3) 自分の思いや考えを適切に表現し、交流する力を育てるための活動

自分の思いや考えを適切に表現するためには、一定の表現技能を習得する必要があります。そのためには繰り返し練習することや、何度も試したり、確認したりするなど忍耐力を要することから、内発的な意欲を伴わない場合は特に積極的になりにくいきらいがあります。しかし、表現のための知識や技能を身に付けることは、ものの感じ方や考え方、判断の仕方の変化を促すものなので、技能の修得が必要であることを感じさせ、積極的に取り組ませる必要があります。

子どもたちは自分の思いや考えにこだわる傾向がありますが、これを単なるこだわりに終わらせることなく、こだわりを生かし、よりよく生きようとする態度へ深化させるよう支援する必要があります。そのためには、他者や対象や事象の「よさ」に触れる機会、つまり「鑑賞」が大切です。ここで言う「他者や対象や事象」とは、友だちを含む他の人の表現、自然の姿、社会的な出来事、人々の生活の中で育まれてきた文化など多様なものを含みます。「鑑賞」を通して、対象の「よさ」を受けとめる感受力が育成され、他者を尊重する気持ちや態度、他人を思いやる心情が育てられるとともに、他と交流する力がはぐくまれます。

次に示すのは、四コマ漫画を題材にして意見文をつくる表現活動の実践例です。自分の思いや考えを表現するためには、まず表現意欲を高めることが必要です。日常的に感受性を育てるとともに、書くことによって他と意見を交流し、自他を認め合う態度を育てることが大切です。

また、想像力を刺激し、表現する楽しさを味わわせる工夫も必要です。起承転結のはっきりした四コマ漫画を題材にし文章化する学習は、構成をはっきりさせ、主題を明確にした文章を

書く力を身に付けさせる上で有効です。また、興味・関心のある教材を用いるとは、作文学習への抵抗感をなくし、主体的な学習を促すことにもなります。

【四コマ漫画から意見作文をつくり、交流する国語科における実践例】

1 指導のねらい

題材をもとに、身近な問題を見つめ、生活を向上させようという姿勢をもち、互いの思いや考えを交流し、自分なりの考えを深めた上で、理由や根拠をあげて、相手を説得する論旨の明確な文章を書く力をつける。

さらに、意見文の交流を通し、互いのものの見方、感じ方、思いを理解し自分自身の意見を再吟味させる。

2 指導の流れ（指導計画（全6時間）とそのねらい】

過　程	学　習　内　容	
第１次(１時)	・四コマ漫画の構成と主題を理解し、絵をもとにした叙述をつくる。	→ 教材による表現意欲の喚起
(２時)	・四コマ漫画の叙述をもとに交流し、自分の意見をもつ。	→ 自分の思いやこだわりをもつ。
第２次(１時)	・意見文を書くための材料を集め、意見を深め、構想の仕方を理解し、構想をたてる。	→ 表現技術の習得
(２時)	・構想を推敲しながら、論旨の明快な文章を書く。	→ 自分の思いやこだわりを基に、相手を説得できる表現技術を磨く。
(３時)	・意見文を批正・推敲し、清書する。	
第３次(１時)	・意見文を交流し、互いの意見から学び合う。	→ 多くの表現に触れ、他の人の思いや表現の「よさ」を感じ、自分の思いを再吟味する。

交流活動を通して対象や事象の「よさ」を捉える感受性と態度の育成には、指導者のかかわりが大きな影響を与えることは、誰もが認めるところです。今までに述べてきた、「自他を大切にした自己表現力」を育てる様々な活動においても、教育活動を生徒の心との豊かな出会いの場、生徒との交流の場、指導者としての生き方についての自覚を深める場として捉える指導者の姿勢が必要とされます。また、子ども理解のための多様で豊かな視点と、子どもの実態や学習に対する適切な分析も必要です。子どもたちは、指導者のこのような姿勢を支えとして、豊かな表現活動を展開し、自己理解・他者理解を深めていくことができるのです。

「生きる力」の育成には様々な入り口が考えられますが、「自他を大切にした自己表現力」の育成を通して、子どもたちに豊かな知性と感性をはぐくもうとする上記の様々な取組は、中学生の発達段階においてはきわめて効果あるものと考えます。